甲子園短期大学紀要 No.27（2009）

関連性理論による子どものことば（発話・会話）の分析（その２）

下道　省三*

The analysis of child words（utterances・conversation）by relevance theory（２）

Shozo SHIMOMICHI*

１．問題

先日、二人の卒業生がそれぞれ10か月の子と１歳１か月の子（ともに男の子）を連れて来学したときに、食堂でしばらくその子たちを見る機会をもつことができた。ベビーカーに座っていた小さい方の子（つかまり立ちができる）は、ことばはまだであるが盛んに発声をしている。相手をしてくれる人をじっと見る。一人の学生が抱っこをしたがすぐに人見知りをして泣き出した。大きい子はよちよちであるが歩ける。うどんやご飯をよく食べていた。その子のことばは聞くことができなかったが、母親の言うことはよく理解できるようであった。また、数日前、電車の中で幼稚園の年長ぐらいのよくしゃべる女の子を見た。吊り広告の電車の写真を見て何か言ったり、横の母親としゃべったり、多くはずっと独り言のように何かをしゃべっていた。この女の子の独り言のようなしゃべりは、誰かに何かを伝達するための発話ではないことは確かであるが、それでもことばであることは確かである。（ただしこの小論では関連性理論と同様に、ことばで相手に何かを伝えようとする際のことば（意図明示的伝達）をおもに扱う。）

ことば、言語使用、伝達（以後コミュニケーションの訳語としてこの語を使う）、会話といった領域（問題）は近年も盛んに研究されている。われわれは言語を自由に操るが、その活動自体についての解明（それがいったいどういうこと（もの）なのかについての解明）は非常に高度な作業であり簡単ではない。言語使用というわれわれの普段の活動についてであるから、研究し再認識する（自覚する）ことが実際に役に立つことはまちがいないのであるが、一方でこの領域は、辛気くさいともいえるし、範囲は膨大で、何よりもプラトンの『クラテュロス』以来の難しい問題である。

このような言語研究が子どもの言語使用や言語習得の問題にどの程度役に立つかは明確にはわからないが、言語や伝達の本質的なことについての理解は子どもの言語の研究にとって不可欠であろう。ことばや言語使用といったものが、いったいどういうものなのかについていくらかでも理解を深めることができれば、それは子どもの言語使用（発話）を理解する上で、あるいは子どもの言っていることの意味を理解する上で有効であるはずである。要するに伝達行為や会話が基本的にどういうものなのかということを理解して、それを子どものことばの分析に役立たせようというわけである。

たとえばグライス理論への批判やそれの発展[(1)]について学ぶならば、発話ということについての理解を深化させたことになる。

＊　本学教授

今回も、おもに関連性理論[2]を私なりに理解して、それを手がかりにして子どもの発話、言語使用を分析しようとした。私は以前の紀要で「説明よりも記述を重視したい」と書いたことがあり、この小論もそういう傾向があるはずである。ちなみに『月刊言語（2009年１月号)』は、「日本語文法記述の挑戦」が特集となっていて、近年は「理論より個々の文法現象の詳しい記述が重視される」ようである。

また近年、次の３つの本が翻訳されている。トマセロ『ことばをつくる』[3]、ライカン『言語哲学』[4]、カーストン『思考と発話』[5]である。トマセロは『ことばをつくる』の中で、「この20年で、発達心理学・言語学・そして認知科学において、この状況を再評価すべきであると示唆する多くの出来事があった。」と述べて、近年の研究成果が子どもの言語習得（発達）に新たな視点をもたらしたとしている。また、生後１年目の終り頃に「共同注意フレーム」「伝達意図の理解」「役割交代を伴う模倣という形での文化学習」という３つのスキルが作られ、それが言語の出現をもたらすという考え方を述べている。この考え方は十分に検討する価値があると思われるが、今回のこの小論ではこの時期（ことばをしゃべり始める時期）の言語についてはあまり触れていない。[6]ある程度ことばらしきものをしゃべる２歳ぐらいから５、６歳ぐらいまでの子どもの発言について分析している。（すなわち言語獲得よりも言語使用を考察している。）

またこの研究が、幼児教育（保育）の研究や発展への貢献を意図したものであることは当然である。この研究は、乳幼児がしゃべるようになる際に何が重要かということを考察しているともいえる。『保育所保育指針』[7]（以下『指針』と略記する）及び『保育所保育指針解説書』[8]（以下『解説書』と略記する）の「保育の内容」にはそれが書いてあるはずである。発達を援助するための方法が書かれていなければならない。

『指針』は保育所での保育は、あるいは発達を援助するためにはこのようにやればよいということが書いてあるものだと私は思っているが、その認識はある程度当たっているように思う。例をあげれば、旧『指針』[9]の「第３章６か月未満児の保育の内容」の「発達の主な特徴」には、ことばの発達にとって大切な経験が何かが書かれている。「周りの大人との温かく豊かな相互応答的な関係」「生後３か月頃には、機嫌のよいときは、じっと見つめたり、周りを見まわしている。周りで物音がしたり、大人が話していると声のする方を見る……微笑みも生理的なものから、あやすと笑うなど社会的な意味を持ちはじめる。」「『ア・エ・ウ』等の音を出したり、『ブーブー』とか『クク』という声を出す。」３、４か月頃には周囲の人たちとやりとりができるようになることがわかる。

また、たとえば『解説書』123頁の「【参考】子どもの発達過程における保育の視点（例：「言葉」)」は、発達過程ごとに「子どもの発達と保育をとらえる視点」ということで子どもの発達の姿が細かく書かれているが、それらは保育士による援助が示されているともいえる。たとえば表の「Ⅱ．おおむね６か月から１歳３か月未満」の３つの項目の一つは「保育士等と視線を合わせ、喃語や声、表情などを通してやり取りを喜ぶ。」であるが、子どものそのような姿は同時に保育士による援助の仕方（保育内容）を示している。言葉の領域に関しては保育内容が示しやすい（わかりやすい）ともいえようが、この表はことばの発達の援助の（妥当な）仕方をわれわれに示してくれているのである。もっ

ともこの小論のような、研究ということであるならば、子どものことばの使用についてのより深い原理的な分析が目指される。

２．意味の伝達

われわれの行なう伝達あるいは会話では、多くの場合、ほぼ正確に伝え合いができていると言ってよいだろう。相手の言っていることの意味が瞬時にわかることが多いし、認識や推論も絶えず行ないながら相手の言っていることの意味を理解している。

それはその場面（状況）において相手が正確に（過不足なく）言っている（表現している）からでもあるし、聞き手が正しく、しっかりと推論しているからでもある。しかし二人の間で想定や解釈が違ってしまうこと、すなわち意味が正しく伝わらないこともしばしば生じる。とくに子どもとの伝達においてはそれがより頻繁に生じていると考えられる。もちろん子どもは日々学習し修正していくし、伝達能力も発達していくので、年齢に伴ってそのような事態は少なくなっていくであろう。

ある社会学の教科書に次のような箇所があった。「列車の窓から１本指を出して弁当売りによびかけると、それは駅弁を１つくださいという意味であり、じゃんけんぽんで２本指を出すとハサミを出したという意味であり、同じ２本指でも、あるときはそれがＶサインで、勝ったぞという意味であったり……、また、扉の向こうでエヘンとせきばらいをすると、来ましたよとか、私はここにいますよとかいう意味であり……、もっと複雑なことならことばを伴いながら動作をしたり、動作はしないでもことばだけで相手にはたらきかけたりする（簡単な例をあげれば、「待て」と言うことは、そういうだけで、相手の足をとめさせるだけの影響力をもつ行動である）。」[10]

これらは日常よくある「意味」の伝達の例である。意味の伝えあいの単純な様式から言語による複雑な様式までが示されている。ある状況（文脈）の中で、お互いの知識や慣習を背景にして、発話や動作やシグナルを使って意味の伝達が成立している。

最も単純な意味の伝えあいは次のようなものであろう。散歩をしていて、それほど広くない道で、向うに犬を連れている人がいる。こちらにまだ気づいていなくて、私がわざと足音を大きくした。向うは私に気がついて、犬の手綱を短くした。

このときの私の行為（音を立てた）の意図（当面の意図）は「私の接近に気がついてほしい」である。詳しく言えば「飛びかかられたら嫌だからその人が私の接近を知り、犬が私に飛びかからないようにしてください」である。（私の接近を知ることがあなたにとってもよいことだと私は考えている。）

ふつうは犬の散歩をしている人は周りに注意を配っているから、わざと足音を大きくするようなことは少ないであろう。無言のコミュニケーションは頻繁に行なわれているといえよう。（ちなみにこの暗黙の了解が、現代社会ではうまくいかなくなってきているのではないか。）ましてやことばで相手の注意を喚起するというようなことは経験したことがない。

わざと強く足音を鳴らして、「私が通ろうとしていますよ」という意味を表現するならば、これは「通りますので犬が近づかないように注意してください」とことばで言う（言い方や声の調子はいろいろであろうが）ことに近い。

発話には様々な種類があるが（あることを伝える、相手を説得する、間を持たせる、屈託のないおしゃべり、幾何学の証明を示すなど）、

上のような状況でことばに出して言うということは、「満を持して」とか「伝家の宝刀を抜く」のような感じであり、自分の意図を明示的に示すということになっている。これが発話というものの典型であるといえよう。

まず発話というもの自体が意図を示すものであると考えておきたい。もちろん発話された内容すなわちことば（文）が意図を表すことになっている場合が多い。しかし、しばしば真意を（意図を）直接言わない言い方をわれわれはするものである。誰かが話すのを聞くということは、話者の心理状態や意図についてのいくつかの仮説を用意して聞くということである。たとえば「あの人はあのように言っているけど私のことを嫌っている。」と察する。教師が前に立って話をする。何を言いたいのかは、言っている内容をよく聞けばかなりわかる。しかしことばは外交辞令の場合もある。学生は本当に怒っているのかなど真意を探ろうとしている。

われわれは絶えず相手の意図について推測している。「今、11時５分前ですよ。」と言った人の意図が、早くしないと遅れるぞなのか、もうあきらめなさいなのか、夜も更けましたよなのかをわれわれは推測している。われわれは成長するにつれて過度に言語的な意味（語彙による理解）にとらわれすぎるようになるのではないだろうか。文字のみによる解読の作業すなわち本を読むという作業が中心になってくるからそれは仕方がないことなのか。とくに文字は意図的なものをあまり伝えない。本を読むときに筆者が怒っているか悲しんでいるか、どういう気持ちでいるかなどはわからないこと（あるいは問題にしないこと）が多い。とくに学問的な本は、科学的、論理的であることを要求されている。[11]

さて伝達行為の中でもことばによる伝達すなわち発話ということになると、より複雑な内容をもつことになる。まず発話というのは、返答を期待するという特徴をもつと思うが、それは相手の反応を期待するということでもある。「ただいま」、「おはよう」などの挨拶に対しては、「あー」でも「はい」でもかまわないが何らかの返事がないと不快感をもつ。「聞きました」という一種の協調の態度が必要なのである。次に発話は一種の表現であるから、それ自体が楽しいということでもある。ことばが何らかのものを表現する力（ことば自体の実感性）は、われわれが親しんでいるものである。ことば自体に印象が付随してしまっている。ことば自体のもつ力あるいはことばのイメージの力というふうに言ってもよいかもしれない。（たとえば「泳げタイ焼きくん」という歌のテレビでの映像で、釣り針で釣られる映像（漫画での映像）があるが、「釣り針が口に引っかかって」ということばの方が、実感性は強いように思う。）最後にこれが一番の特徴であるが、ことばの内容（文の意味といわれるもの）すなわち情報的な意味をもっている。[12]

３．発話理解・言語使用

発話・会話における伝え合いを分析すること、及びその成果にもとづいて子どものことば、伝え合いを理解することがこの小論のテーマである。われわれは相手の言ったことをどう理解しているのか、子どもはその点で大人とどう違うのか。あるいは大人の一応完成された発話（会話）というものの特徴をどう見るか。子どもの発話はそれらの点でどうなっているのか。

われわれが行なっている言語使用（あるいは発話、会話）についての議論は言語学、語用論の領域である。それは大人の言語使用の研究であり、子どもの言語使用の研究と比べると、実

際の言語使用例を容易に手に入れることができるし、実際の使用者である本人の観察や直接経験（意識）を利用できるという利点がある。しかし長い時間を経て獲得された高度で複雑な活動、行為を扱うという点では、子どもの言語使用の研究よりも不利であろう。まず大人の言語使用について考えてみよう。

伝えあいは身近なものであり絶えず行なわれている。内的言語を含めるとさらに頻繁に言語使用が行なわれている。しかも、このように、ことば自体（言語使用自体）について考えている。

われわれはことばには否応なく耳を澄ませてしまう。市の広報車の拡声器のことばらしきものが近づいてきたら、「何か言っているな、何だろう」と聞いてしまうが、これまでの経験からとくに聞き耳を立てるほどのことは言ってはいないと最初から不快な思いを持ってしまうかもしれない。厄介なことに、周りで言われていることは、聞くに値しないたてまえ的な言辞や、陳腐で自己満足的なおしゃべりである。それらに比べてわれわれが従事したいのは、教育的場面で交わされる真実のことばや対話（ボルノー、プラトン）のことばや日常の楽しいおしゃべりなどであろう。

前述したように、このテーマについて整理して総括的に満足のいく説明をすることは複雑すぎて困難である。関連することがらについての断片的な考察になる。

会話や伝達あるいは言語使用は、唯一無二の時間と環境で起きる非常にダイナミックなものでる。時や場所が違えば、同じ相手の同じことばでも違った意味で受け取ることになる。厳密に言えば人間は日々学習し発達しているということになるから、同じ会話というのはありえない。われわれは相手のことばをもとに常に新しい解釈をおこなっている。その会話の場では、相手は関連性のある発話をする。聞く人はそのことばを聞いて、ある（新たな）想定をもつことができる。それは生きた解釈である。

もちろんことばは社会的な慣習（社会的な記号）である。ことばは最初は身近な人たちとの伝え合いにおいて使われるが、その際、身近な人たちは社会的なことばを使う。人々が同じことばを使うということは、ことばが社会的、慣習的な意味をもっているということである。

ことばが使われて誰かが誰かに何かを伝える。その際、二人の人間にはそれぞれに過去の記憶（二人に関係するいろいろな出来事を知っているなど）があり、多くの知識（相手のことについてよく知っているなど）があり、現在もその場の多くのことを認知しており、ある種の心理状態にある。要するに二人とも多くの手がかりを持ちながら会話をする。その場合には、語の記号的な意味（語自体の意味性）は弱体化している（語の記号的な意味に過度に頼らなくてもよい）だろう。

あるスーパーのパン売り場で、その日はパンが３割引なのだが、夫婦で買い物に来ていたおばあさんが「いつもと変わらないな」と言ったとする。これを近くで聞いた人は、このおばあさんの言った意味がおそらくはわからないであろう。何らかの意味をそこから推測するのは難しい。ひとつの有望な解釈は、３割引がわかっていないというものだろうが、大きく表示されており、その場でそういう解釈に至るのは難しいのではないか。（実際にこの例のような意味不明な発言に出会うことは少ないであろう。多くの場合、その場での認知や推測をはたらかせて相手のことばを理解できる。）

一般に発話理解においては、何を言いたいのかの推測過程が常に（語の意味理解（コード解

読）と平行して）行なわれているといえよう。さらに子どもの場合は、語の意味を推測する作業をしなければならないことが多い。

ここで、少々突然であるが「要するに人は、相手にわかるように言っている。」という命題について考えてみよう。（私のこの前後の文章がその命題に反していないことを願うが。）会話で相手に何かを言っている場合、直前に相手が言ったこととつながりがあって、それに何かを付け足して、意義のあること、相手にとってためになること（相手の知らない新たな情報とか、話題になっていることへの別な角度からのコメントとか、おもしろいこととか）を、相手が読み取れるように言っている（相手に理解されると思って言っている）。時には、少し考えてはじめてわかるような言い方もするが、適切な正確さ（細かさ）で言っていることはまちがいない。わかり合うためのコミュニケーションであるから、われわれのおこなう表現の厳密さ（的確な語の使用）は驚くばかりである。お互いが似たような想定をもっているのであるから、冗長に過ぎる言い方はしない。省けるものは省く。効率的におこなえるのである。（時にはイメージを使って、レトリカルに。）

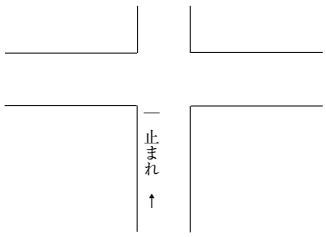
これはふつうのこと（当然のこと）であって、あえてこのように大げさに言わなくてもよいと思われるかもしれない。上のことを、「関連性の保証があることを信じて、読み取ることをしている。お互いその原理に従っているはずであると皆が思っている。」などといえばなおさらであろう。しかしここでは関連性理論にもとづいて話を進めてみたい。

一般に、相手の発話を理解する際には、会話でわれわれが使っている法則に照らして推測するが、とくに重要な手がかりとなるのは、「あなたに関連性のあることを言っていますよ」という保証である。すなわちわかるように言っています、役立つことを言っています、ちゃんとツッコミをしていますという保証である。実際に人は含意、意味を読み取る能力がある。

関連性理論の用語を使えば、お互い今の想定（文脈、記憶）にもとづいて相手から言われた情報を解釈する（すなわち今の想定に新たに付け加えるか修正して統合する）。そうであれば相手は関連性のある発話をしたということになる。

発話は発展でなければならない。相手と同じことをもう一度言わない。相手のことばに対して自分の考えを加えて言ったり、相手のことばにツッコミを入れたりしないといけない。関連性がはたらいてわれわれは話しをする。それは、話しは、何か新しいこと（内容）を含まなければならないということである。相手が何かを連想する（新しいことに気がつく）ことにつながるようなことを言わなければならない。

ここでわれわれの認知について例をあげてみよう。いつも歩いているそんなに広くない道を、図の矢印の方向に歩いているときに（図は上から見た図である）、この道が一方通行なのかどうか気になった。（前からも車が来るのだろうかと。）そのとき、前の方に（道の左側の地面に）図のような「止まれ」があるのが見えた。「止まれ」が真ん中ではなく左側にあったので「一方通行ではない」という意味（関連性のある情報）を受け取ることができた。新しい目の前の情報によって、確認（確認のための補強）



ができたということである。われわれは意義のある情報、手がかりに気がつくことができる。こういうはたらきは会話の際にも行なわれている。そしてわれわれは会話において関連性のある情報を言い合っている。一般にいろいろなこと（情報）は、関連したものとなっている（つながりをもっている）。あるいは全体としてまとまっている（意味を示している）。ゆえに意味をひき出すことができる。関連したことをさがすことができる。この例のような情報（「止まれ」が左側にある）を含んだ発言が「関連性のある発言」ということになる。

関連性理論という視点からみると、子どものことばに対して大人は関連性のあることを言うこと（応答すること）ができているであろうか。そうでないと話が進展しない（楽しい会話が成立しない）であろう。大人の会話が順調に楽しく進行するときは、お互いが関連性のあることを言うからである。大人同士なら簡単にできても子どもとの会話がそのようになるためには、子どもの言ったことの意味が理解されなければならない。

４．子どものことば
（会話、コミュニケーション）

乳幼児の言語使用について及びその発達の援助（助長）の仕方については、いろいろなことがわかってきているともいえるし、まだ十分にはわかっていないともいえる。ピアジェは、『表象の心理学』[13] の「最初の言語的シェマ」や「前概念」などの箇所で、話し始めの時期の言語使用について新たな優れた心理学的な観察・分析をわれわれに示してくれた。そして「これらのことばは単に単一の類を示すとか、『固有名』であることを示すようなことは少しもなく、ビューラー夫人の統計が示唆するように、真実に、主体に関するか、それとも部分的に客体に関するか、いずれにせよ行為の複雑なシェマを示現するものであることは明白である。」など、乳幼児のことばの意味の特質を明確に教えてくれた。ピアジェの研究を理解することは難しいのであるが、ピアジェから学ぶことはいまだに多い。

子どもはものに対してことばを覚えるのではないということは、ことばの発達の援助において、いっしょに遊びながらことばを使いながら関わる際に、動きや感じや様子や用途を表すことばを多く使うようにしたほうがよいということになるといえよう。（リンゴ、ミカンといった「ものの名前」を言うことを大人が奨励しすぎるから、２歳ぐらいになってものの名前をたずねるようになるというようには考えられないであろうか。）また、ピアジェの初期の研究である子どもの世界観の研究は、現在の言語使用における意図への注目（あるいは他者の心理の理解という問題）と関係する研究であったといえよう。「子どもは何がわかるか」ということが大きな問題であるが、理由的なことを案外わかるという特徴があるのではないか。ピアジェの子どもの因果的思考の研究をあらためて吟味してみたい。

近年の発達心理学の研究成果は、より工夫された実験によって（科学的に）明らかになったというものが多いと思われるが、実験で明らかになっていないことを存在しないこととして全く考慮に入れないという姿勢は妥当ではないと私は考える。

ところでピアジェといえども乳幼児の言語使用の一側面の分析を提供しているといわざるを得ないであろう。高度で複雑な行為であるわれわれの言語使用を捉えようとしているわけであるからそれは当然のことといえよう。このよう

な困難な課題には少しずつ、わかるところから分析を深めていかなければならない。

子どもが何に対してそのことばを使っているのか。子どもはどのような考え方をしているのか、どのように感じているのか。子どもはどの程度ちゃんと会話できているのか、コミュニケーションできているのか。この小論はこの難しいテーマに対するほんの部分的な分析の試みである。

子どもとの意味の伝え合いの様相を知ることは、そこで何が起こっているのかを明らかにすると同時に、それ（意味の伝え合い）がより円滑に、より満足のいくものになることをもたらすであろう。昔から養育者が行なっている言語的なはたらきかけの意義が、より明瞭に意識されることになる。

結局、関連性ということばを使えば、より関連性のあることばは会話を弾ませる。あるいは本来の楽しい会話が進行するためには関連性のある発話をする必要がある、と言ってよい。

子どもはどういうことを言ってほしいのか。関連性のある発言を望んでいるはずである。すなわち大人は、話し相手の子どもにとって関連性のある発言をする必要がある。その子がわかる情報を、あるいはその子が過去の記憶と照らし合わせて新しい情報を構成できるようなことを言う必要がある。会話の発展のためには、新たな角度から付け加えるとか、関連する情報を提供する必要がある。

また、子どものことばを聞くときにその記号的な意味、概念的な意味に我々はとらわれすぎているのではないだろうか。もともと（原初的に）意図というものがコミュニケーションの内容といえるのではないか。そのような問題意識をもちながら、ここではおもに関連性理論を手がかりにして子どもの発言を解釈することを試みる。発言には昨年の紀要（拙著）でコメントしたものも含まれるが、新たな解釈をしている。

発言は、①ぐるーぷ・エルソル編『こどものことば』晶文社1987年、②朝日新聞「いわせてもらお」欄、③毎日新聞社編『子供のつぶやき』1989年、から選んだものである。

選んだ発言はおもに周りのおとなが言ったことばがうまく伝わらなかったという例である。文脈の理解ができなかったということでもある。一般に大人と子どもの会話はなかなか噛み合わないが、これらの発言例は、大人の側に子どもの発話理解についての理解がもう少しあれば（大人が子どもにとって関連性のある発言をしたならば）、会話が成り立ったり進展したりしたはずの発言例である。

［発言例１］（②より）＜難問＞

遊びに来た３歳の孫娘が、ハサミで紙を切って遊んでいたが、あきてきたのかハサミを放り投げた。「危ないでしょ。そんな悪いことしたら、お巡りさんに、ろうやに入れられてしまうのよ」と諭すと、「ろうやってどんなところ？」。「動物園のオリのようなところよ」と教えたら、「動物園の動物は、みんな悪いことしたの？」。

〈コメント〉祖母の意味したことが伝わっていない。子どもにとっての関連性がある形で理解してしまっている。関連性のある発言とは、聞き手にとって「よい」発言、あるいはためになる発言、あるいは新たな想定を構成する手がかりになる発言（会話とは話題の提供のし合い）であり、その際には話し手は相手にわかるように言っている。

［発言例２］（①より）おんな５さい

これは　ゆきちゃんのおかあちゃんと　ゆきちゃんのおとうさんと　ゆきちゃんのおばあちゃんだよネ

――ウン、そうダヨ。ゆきのおばあちゃんはおとうさんのおかあさんだよ
ちがうの　ゆきちゃんのおばあちゃんなの！おとうさんのおかあちゃんじゃないもん
――じゃ、おとうさんのおかあさんは？
おとうさんのおかあさんはいないの！　どこにもいないの　しんじゃったの
［発言例３］（①より）おとこ３さい
　スペースシャトルのおもちゃであそびながら
これはただの　ひこううちゅうなんだよ
――飛行宇宙？
うん　ひこううちゅうなんだよ
――宇宙飛行船じゃないの？
うるさいな
――宇宙飛行船じゃないの、宇宙飛行船だよ。
うちゅうひこうなんだよ　ふうせんひこう　うちゅうひこう
〈コメント〉この２つの発言例はともにその話題について、大人が子どもに関連性のある発言をしているかどうかが問題である。単にことばの修正だけで終わっている。大人と子どもがお互いに譲歩した方がよい。
［発言例４］（①より）おんな４さい
　「刑事コロンボ」を見ながら、母と
――そろそろ、しっぽが見えてきたぞ。
どこにしっぽがついとるん？
――悪い人には、おしりからしっぽがはえてくるんよ
〈コメント〉「おしりからしっぽがはえてくるんよ」という応答は、一見関連性がありそうに思えるがそうではなく、「しっぽがみえる」の説明が難しくても嘘を言うことなしに、最大限にわかる説明をするべきであろう。
［発言例５］（①より）おんな５さい
――ほら、ウワサをすれば影とやらよ。向こうから来たわよ。
――ほんと、ウフフフ……
ウワサって　なあに？　みんなでいじめるの？
――ちがうの。みんなでお話しすること。
フ～ン　みんなでわるくちいうんだ。
〈コメント〉この子は実際の使用の方を信じている。
［発言例６］（①より）おんな４さい
　ニュースを見ていて
どうしたの？　このひと？
――死んだんだって。
じさつ　したの？
――ちがうの。刺されたの。
かに　さされたの？
〈コメント〉この大人の発言は、子どもにとってあまり関連性のない発言である。
［発言例７］（①より）いもうと３さい・あに７さい
　風呂場から、湯気が出てくるのを見て
♡　どこから　けむりがでてくるの？
――おふろのゆげよ。けむりじゃないのよ。
♡　どこが　かじなの？
♣　おかあさん　あゆみには　ゆげって　わからないんだよ　むずかしすぎるんだよ
――じゃあ、なんていったらいいかしら？
♣　そうだなあ　おふろのけむりで　いいんじゃない
〈コメント〉この兄（♣）の最後の発言「おふろのけむり」は、妹の発言に対する関連性のある発言であるといえよう。
［発言例８］（①より）おんな７さい
トイレットペーパーばかりかって　まえのがだめになるでしょ
――順番に使っていくんだよ。
そうか　そうしないと　まえのが　かせきになっちゃうもんね

〈コメント〉この発言例は、会話になっているし、母親の発言は関連性のある発言である。次の２つも周りの大人が関連性のある発言をしている。

［発言例９］（①より）おとこ３さい

風船から手を離してしまって

あーっ　おかあさん　ぼくのふうせん　とんでっちゃった　どこへいくの？

――ああ、残念。　お空のずうっと上で、鳥さんと遊んでいるかもしれないよ。

さようならあ　ボクのふうせん

〈コメント〉この大人の発言は子どもにとって関連性があるといえよう。

［発言例10］（①より）おとこ３さい

あっ　くらくなったよ

――そう、お日さまが、雲のかげにかくれたんでしょ

そうか　おひさまも　あついんだね　きっと

〈コメント〉「かくれた」ということばは、意図や意志を示す。

［発言例11］（③より）サスガお兄ちゃん！

長女（３歳）がパジャマを着ながら、お菓子をつまもうとするので「お菓子はにのつぎ、パジャマが先よ」。すると５歳の長男、すかさず「そうだよ、おやつは３時だもんね」と言った。

〈コメント〉意味について考えさせてくれる例である。周りで言われていることばの意味を自分なり推論して解釈する。子どもはとくにこの種の推論を強く行なっているのではないか。

［発言例12］（③より）マメ電球

「ピーナツ電球にしてョ！」と、３歳の息子。息子にとっては、豆＝ピーナツだったんですね。

〈コメント〉意味は記憶されていたが、ことば（名前）はそうではなかった。

［注］

（１）ライカンは、グライスの考え方を次のように紹介している。「文の意味とは、話し手の意味によって決まるものである。」「話し手の意味が話し手の心的状態によって解明されるべきである。」（W．G．ライカン（荒磯敏文ほか訳）『言語哲学－入門から中級まで－』勁草書房、2005年、146ページ）話し手の意図の認識がコミュニケーションにおいて行なわれているということに注意を喚起したグライスの功績は大きい。しかし、語や文自体の意味をそれほどまでに無視するのは正しくないだろう。コード解読に我々が従事しているのは間違いない。会話においてはコード解読に従事しながら、解釈や推論を進行させているというのが正しい理解であろう。

（２）D．スペルベル・D．ウィルソン（内田聖二ほか訳）『関連性理論－伝達と認知－（第２版）』研究社、1999年

（３）M．トマセロ（辻幸夫ほか訳）『ことばをつくる――言語習得の認知言語学的アプローチ』慶応義塾大学出版会、2008年

（４）ライカン、前掲書

（５）R．カーストン（内田聖二ほか訳）『思考と発話－明示的伝達の語用論』研究社、2008年

（６）最初のことばに関しては次のような仮説を提出しておきたい。まず発話におけることばは、表象に対してのことばであると考える。最初の表象は、養育者との表象の共有という形で出現する。ゆえに最初のことばは共有という形での表象に対して使われる。それ以前は、周りの出来事は同定という形で捉えられ、それを再現するという表象のはたらきはみられない。

（7）厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館、2008年

（8）厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008年

（9）厚生労働省『保育所保育指針』チャイルド本社、1999年

(10) 中野卓ほか『社会学』医学書院、1992年、6ページ

(11) 他人のしぐさに意図を感じる（たとえば電車内で前の席の人が髪の毛を触っているとすると、私へのあてつけかと思ってしまう）というのは、乳児期における人の意図（意志、主観）の理解に始まるのではないか。また人工論（ピアジェ）が乳児期における意図理解に端を発していると考えられないであろうか。

(12) ただし、ことば自体に意味があるとは必ずしもいえない。たとえば、先日、電車内で私のとなりに座っていた2人の女子大生が周りに聞こえる声で「髪の毛が…」などとしゃべっていた。私はそのときは帽子をかぶっていたために、そのことばが私へのあてつけかと（あるいはルールに反した発言だと）不愉快にならずに済んだ。

(13) J．ピアジェ（大伴茂訳）『表象の心理学』黎明書房、1988年、15ページ